

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370972

研究課題名(和文)現代中国における葬儀からみた「人」のあり方に関する社会人類学的研究

研究課題名(英文)A study for the idea of human in modern Chinese funeral rituals From social anthropological perspective.

研究代表者

田村 和彦 (TAMURA, Kazuhiko)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：60412566

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、葬儀従事者へのインタビュー、火葬場での参与観察、中華民国期以来の葬儀関連政策に関する文書資料の分析を方法として、葬儀の場で表現される、近現代中国における「人」の概念の変遷を明らかにした。中華民国期に「発明」された新たな様式である「追悼会」は、中華人民共和国期に至って個人と国家を直接向き合わせる儀式へと変容したが、改革開放以降、殯儀館のサービスに多様化がみられ、徐々に「個人化」するとともに、かつて排除された「孝」、「家庭」内での期待された役割が入り込み、「人」の主要な表現となりつつある。ただし、そこで強調される「孝」や「良き夫、妻」は、旧社会のそれとは同一ではないことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)： The aim of this study is to give light to “human” idea of modern/contemporary Chinese society from analysis of funeral rituals.

By three ways that 1) interview of old funeral workers, 2) participate observation for contemporary funeral parlors, 3) analysis of funeral policies and records in nation and field levels, I clearly proved following process. I cleared up that “Zhuidaohui” (new style of funeral rite) was made during late imperial China and Republic of china era, and in P.R.C era, the new style of funeral rite became to emphasis individual face to nation directly. But after economic reform policy, funeral parlor started to consider themselves as service section, they made many services that including “Xiaodao” (filial piety), relationship in family. As a result, some words and idea revival in funeral rituals as a important factor that make “human” idea, but these are different with past meanings in old Chinese society.

研究分野：社会人類学

キーワード：社会人類学 死生学 中国研究

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、文化人類学的アプローチから、現代中国における「人」の観念を明らかにするための作業のひとつと位置づけられる。中華人民共和国においては、その社会主義的指針に基づいて、1950年代から急進的な葬儀の改革をおこなってきた。具体的には、(1)墓葬改革(運動開始時期にはこの名称が用いられた)と呼ばれる、土葬から火葬への変更、(2)葬送儀礼から「迷信」と呼ばれる要素を排除し、「科学的」な視点に立った「追悼会」と呼ばれる故人の顕彰への変更、(3)宗族と呼ばれる父系原理に基づく埋葬地選択から、墓地の排除時期を経て、公共の墓地形成への変更から成る。この一連の改革は、時期により強調点を異にするが、一貫する方向性が存在する。それを一言で言えば、無神論的な立場に立ち、死後の世界を否定することと同時に、国家と個人が、宗族や家族を介することなく、直接的に向き合うことにある。従来中国における葬儀研究においては、前者の方向性への考察が集中する一方、後者の、国家と個人の関係へ踏み込んだ研究は極めて少ない。

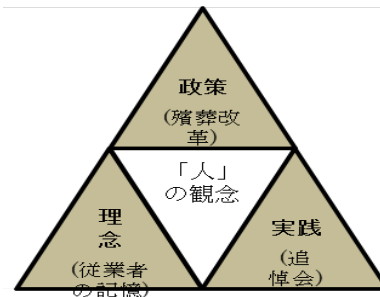
近現代中国に関する人類学的葬儀の研究では、中国各地の民族誌のうちで葬送儀礼の変化と政策の関係をとりあげた Zhou Shaoming の山東省の事例、川口幸大による広東省の事例などがあり、いずれも優れた研究であるが、農村部における権力関係の分析にとどまる(Zhou:2009、川口:2013など)。また、申請者と同じく、都市部の葬儀改革、殯儀館を分析した研究も現れたが、制度や法規の分析を中心とした文献資料中心の研究であり、本研究とは大きく目的を異にする(Jackson:2011)。個別の研究課題については進展がみられるが、人の観念についての総体的な議論としては、James Watson や Martin Whyte、Jankowaik らによる 1990 年代初頭の議論を大きく超え

ていない (Watson & Rawski:1990、Jankowaik :1993 など)。

### 2. 研究の目的

上述した先行研究の動向と、約7年にわたる申請者自身の殯儀館におけるフィールドワークを踏まえ、本研究では、葬儀改革がもたらした人間関係の変化に着目することで、上述の、国家と個人の間関係を明らかにする。その際に、葬儀改革が目指す理念型としての関係性および、その具現化としての「追悼会」形式を「国家モデル」として捉え、実際におこなわれている様々な追悼会をその実際の現れと捉える。本研究では、「人」のあり方に関する国家モデルを精査するとともに、研究の力点を実際の追悼会の分析におく。しかし、両者を対立的に捉えるのではなく、両者はともに、世界各地の葬儀改革の情報から影響を受けるとともに、同じ過去からの拘束を受けるなかで成立していることを明らかにする。この考察は、実際の葬儀を執りおこなう中間集団に注目することで顕著となることが予想された。

国家モデルでは、個人は内省的に国家と向き合うことで良き人民たることが求められるが、実際の葬儀は必ずしも国家モデルの要求する形式ではおこなわれ得ない。これを、葬儀の管轄部門である民政局および



その発行する資料では、「逸脱」と捉え、「正しい」

国民であるように修正することを志向する。一方で、従来中国における人類学的研究では、現地での観察に基づき、この「逸脱」に積極的な意味を見出してきた。しかし、ここでの「良き」あるいは「正しい」

い」という判断は、それが無意識に、あるいは自動的な追従であれ、自覚的な旧慣の改革であれ、共通する基準との交渉のなかで展開されている点が重要であるが、従来の研究では、社会主義的あり方と、現地の慣習の差異を強調する一方で、この点が十分議論されていない。共有する文化空間に包摂され、過去に拘束されつつも、一定の自律性と調整や創造による変化のダイナミズムが見逃されてきた。このため、本研究では、上図のような関係性のなかで、現代中国における死の処理からみる「人」のあり方を考察する枠組みを設定し、「研究計画・方法」の項目で後述するアプローチによって、このテーマに新機軸を打ち出すものである。

### 3. 研究の方法

上述の研究目的を達成するために、以下の研究方法を計画した。

#### (1) 葬儀事業従業者との共同作業による「追悼会」の参与観察

葬儀事業従業者は、葬儀施設を利用する遺族からみれば直接対面する国家政策の末端であるが、同時に、多くの従業者はその地域の生活者であり、葬儀に関する当該地域の慣習を共有している。現在、中国の葬儀、とくに都市部の葬儀では、国策によって基本的な形式、名称が統一されている一方で、「地域の実情に応じた」と紹介される様々なバリエーションが存在する。こうしたバリエーションを生む力学は、彼らによる環境への働きかけ、労働環境の調整や遺族の満足度を高めるための創意、工夫の結果である。この中間集団と呼ぶことのできる人々が、関連法規と現地の慣習的拘束のなかで葬儀を具現化しているということが出来る。

この集団に対しては、研究方法として、実際の葬儀での参与観察をおこなった。

#### (2) 葬儀事業退職者へのインタビュー調

査

上海・北京・南京など中華民国期からすでに近代的葬儀産業の発達した地域を除いて、中国の多くの地域では1970年代に殯儀館が普及しており、第1世代の作業員たちは、ほとんどが退職しつつある。彼らはその多くが「家属院」と呼ばれる職場の宿舎に居住しており、現時点では彼らへのインタビューを通じて、記憶を用いた価値変遷の研究が可能であることを、これまでの殯儀館におけるフィールドワークにて確認していたため、彼ら彼女らへの個別のインタビューおよび座談会形式での会話の場を設けるアプローチをとった。その際に、聞き書きから過去の状況を再構築するのではなく、記憶される葬儀＝死の布置とはどのようなものであったのかを探ることに重点をおいた。この作業を経ることで、関連法規の分析や、葬儀会場でのフィールドワークのみによる考察を相対化し、より立体的な分析を試みた。

#### (3) 殯葬博物館および地方都市檔案館での文献資料収集

文献資料については、殯葬博物館およびその殯儀館が所在する地方都市の檔案館を主な調査地とした。葬送儀礼および火葬までの作業は、地方都市においては概ね13時頃までには終了するため、その後の時間を文献収集と、上述の退職者へのインタビューにあてた。

### 4. 研究成果

上述の方法による調査研究から、以下の結果を得た。

現代中国における社会主義的葬儀改革のなかで、新規の法体系とそれに基づく新たな儀礼の創出、およびそれらへの対応、過去の拘束とのなかで故人と家族がどのように再構成されているのかという問題系について、新たな知見を得ることができた。

これは、従来の葬儀自体に限定された研究のみからは到達しがたい研究成果であり、文書資料、葬儀の観察という手法をずらし、地方都市における葬儀政策の中間集団への二種類のフィールドワーク(葬儀会場での

参与観察、退職者とのインタビュー、座談会)と文献調査を統合する手法を採用することで可能になった、と考える。

具体的には、かつて1960年代から70年代にかけて、地方都市に火葬場、殯儀館が爆発的に普及した際には、あくまで国の指針に従った、顕彰の「価値ある」死が選択され、その得るべく位置に該当する追悼会が営まれた。こうした作業に関わった当時の殯儀館従業員は、その死を国家に結び付ける象徴と言説を多用した。ここで選択された死者は、工場での作業の過程で落命した労働者や政治幹部らであったが、こうした人物そのものを、直接国家と向き合わせる儀礼が構築されていた。

他方で、当時の追悼会が(彼らのいうところの)「特別な」死であったこともあり、本来、こうした国家の死の位置づけを普及させる装置としての側面も併せ持つ殯儀館での葬儀は決してすべての人々を包み込むように普遍化してゆくことはなかった。

1980年代後半から火葬率の再向上を目指し、法制化が進み、独立採算制が強化される中で、国家の死生観普及の装置としての側面は、若干弱まり、サービス業としての側面が強化された。2000年代以降は、従来の民政局出身の幹部だけでなく、民間企業からの経営者の抜擢などを経て、サービス産業として、より多くの人々に受け入れられ、利潤を上げることの可能な枠組みを模索する中で、新たな社会的ニーズを積極的に導入する様子を確認できた。

そこでサービスの焦点として再度注目を浴びた対象は、個性化あるいは個人化と呼ぶことのできる、ほかではない「私」の死の演出と、かつての中国社会での価値観を表象する関係性の強調とであった。後者は、「孝」や「家庭」に関する、「夫婦和睦」、「父として、母として」という人間関係であり、社会主義化の中で一度ははく奪された、多くの人々が持ちうる基本的な人間関係への再焦点化がみられる。ただし、これらの「伝統的な」語彙をもって表現される関係性は、社会主義化以前と同様の指示内容を持つものではなく、この点を「儒教的語彙により語られる、新たな人間関係」と位置付けた。そして、ここで強調される関係性は、社会秩序という意味においては、決して現行政府の意図から外れるものではない。この側面から、殯儀館はかつては「旧文化」陋習を打破する文化センターであったが、現在では「民俗の精華」である良俗を涵養する文化センターとして、その推し進める方向性は大きく転換したものの、機能としては同様の役割を担っている、とも考えられる。

この研究を通じて、葬儀の場における故人のあり方からみた、という限定の上ではあるが、社会主義的現代を生きる中国の人々にとっての「人」の観念の変遷と、そ

れを可能にした現場の力学と背景について明らかにしたことで、本研究の当初目指した目的を達成した、と考える。

最後に、当初予定した施設の一部への訪問が実現しなかったことと、今回収集した退職者たちの経験が、どの程度の広汎性を持ちうるのか、また、ここでの語りや、政府の主導する葬儀改革とどのように関わりあうのかについては、今後の課題としたい。これらの問題を明らかにするためには、民政局101研究所(北京)および長沙民政学校(湖南)への取材が有力な入口になると考えられるため、これらの施設への調査を可能にする方法を検討中である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

1. 田村和彦、「メディアを取り込む日常生活分析のあり方について 中国の民間活動とメディアの関係から」、日常と文化研究会(編)『日常と文化』Vol. 3、29 - 42 頁、査読なし、2017年3月
2. 田村和彦、「従生活話語来看“歴史”記憶 以陝西同治回民起義為例」、韓敏、未成道男(編)『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態 東亞人類学者的理論探索』(Senri Ethnological Studies 90)、255 - 269 頁、査読あり、2014年11月
3. 田村和彦、「近現代中国における「正しい」葬儀の形成と揺らぎ 二つの「聖なる天蓋」とその後の展開」、愛知大学現代中国学会(編)『中国 21』41号、175 - 202 頁、査読あり、2014年8月

〔学会発表〕(計 10 件)

1. 田村和彦、「日本民俗学和“日常生活” - 介紹研究動態和隣接学科」、「民俗学」日常生活転向的可能性フォーラム、中山大学(中国)、2016年11月19日
2. 田村和彦、「試導引入“伝媒”的日常生活分析方法 以中国的民間活動与伝媒的關係為例」、2016年北京大學中日韓三国學者會議、北京大學(中国)、2016年9月3日
3. 田村和彦、「科学技術世界のなかの生活文化 日中民俗学の狭間で考える」、日本民俗学会主催国際シンポジウム「民俗から考える東アジア世界の現在」、福岡大学、2016年7月24日
4. 田村和彦、「中国の「広場舞」をめぐる親密性/公共性形成について」、日本文化人類学会第50回研究大会、南山大学、2016年5月29日
5. 田村和彦、「“広場舞”にみる中国社会考察の可能性 文化人類学の視点から」国際ワークショップ日中社会構造研究会、愛知大学、2015年12月19日
6. 田村和彦、「民俗学系雑誌からみた中国民

俗学の動向 『民俗研究』と、『民間文化論壇』とを事例として、日本民俗学会第67回年会、関西学院大学、2015年10月11日

7. 田村和彦、「從東亜研究来看“diverse anthropologies”的憧憬和“世界体系”有關的憂鬱 - 以朱煜杰世界遺產研究論文与先行研究的非常奇妙的雷同為例」(Expectation for “Diverse Anthropology” and the actuality of “World System” in East Asian Anthropological Studies: Case Study of the Serious Similarities between Previous Studies and Zhu Yujie’s World Heritage Research Papers)、北京大学人類学(紀念費孝通先生)フォーラム: 世界社会与文明展望: 漢語人類学的期許、北京大学(中国)、2015年6月28日

ホームページ:  
<https://www.cis.fukuoka-u.ac.jp/~tiancun/>

8. 田村和彦、「物質文化の変化と生活 中国内陸部における家電・家具・トイレを中心に」、「中国文化の持続と変化 グローバル化の中の家族・民族・国家」、国立民族学博物館(吹田市)、2014年11月23日

9. 田村和彦、「「生活方式」的人類学再思考 以物質/空間/身体的日中研究為中心」、北京大学人類学フォーラム、北京大学(中国)、2014年7月20日

10. 田村和彦、「社会变化過程中的殯葬儀式 以 P. Berger 的 Sacred Canopy 概念為線索」、東亜宗教文化国際學術研討フォーラム「東亜宗教的傳統性與現代性」、華東師範大学(中国)、2014年5月25日

〔図書〕(計4件)

1. 田村和彦、事典項目「葬禮と埋葬 現代中国における人生の閉じ方」ほか計10項目、『中国文化事典』、中国文化事典編集委員会(編)、丸善出版、査読なし、2017年4月

2. 田村和彦、事典項目「中国の家族の変容」、『現代家族ペディア』、比較家族史学会(編)、弘文堂、35 - 37 頁、査読あり、2015年11月

3. 田村和彦、「中国における火葬装置、技術の普及と労働現場の人類学: 新たな技術を受容し、環境を再構成する人々に着目して」、『中国社会における文化変容の諸相: グローカル化の視点から』(国立民族学博物館論集3)、韓敏(編)、風響社、査読あり、51 - 76 頁、2015年3月

4. 田村和彦、「第9章 民衆の葬儀と国家 近現代中国における人々の葬儀」、『変容する死の文化: 現代東アジアの葬送と墓制』、国立歴史民俗博物館、山田慎也、鈴木岩弓(編)、東京大学出版会、173 - 200 頁、査読あり、2014年11月

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等 なし

6. 研究組織  
(1) 研究代表者  
田村 和彦 (TAMURA, Kazuhiko)  
福岡大学・人文学部・教授  
研究者番号: 60412566

(2) 研究分担者  
なし ( )  
研究者番号:

(3) 連携研究者  
なし ( )  
研究者番号:

(4) 研究協力者  
なし ( )